

羈
旅
漫
錄

中
之
卷

ル 4
3495
2



門 3
流 3125
巻 2

門 4
流 3495
巻 2

昭和九年
十月八日
購末



壬戌羈旅漫録巻の中

菘笠漁隱遺稿

垣庵居士正幹校

四十一 光廣卿の寛活

權大納言正位
光廣卿ハ准大
臣光宣ハの男
あり慶長四年
藏入頭止四位
ニ叙せ和歌
細川幽齋ニ字
人々出群の譽
あり寛永十五
年七月薨年
六十法雲院
号也

板倉周防守重
宗ハ勝重の男
あり元和六年
父がすめり

烏丸光廣卿の宅ハ烏丸中立賣小町。そのころ牛飼ども。公卿の家ニ牛を牽ゆき。御用を給ふと問ふ。用あるはとぞ。用なきはとぞ。光廣卿を毎度この牛を雇ふ。花街のあひひたすひぬ。車の上ニ糞を敷その上ニ酒肴を設け。自若とてかゝひ路ひとぞ。松波播磨 江戸あての馬をゆき。とぞ。系へのあひひとぞ。おりのひ合さたり。

四十二 板倉侯の大量

板倉侯所司代の時。まづ公家衆花街へ。ひ路もん。夏を下。白か。びら。冬ハ白無垢を着用ある。あうらさ。

壬戌羈旅漫録

卷之中

長三堂辛

ふくく京職
補せられ在職
三十四年明曆
二年十二月卒
七年七十

戊辰華方ハ金

まの。制度の害よあるも。かゝるあまられたる。その頃すを
ハ。政もゆるや。あふ侍り。同人話るの二條橋本
經亮来りてうらまひ

四十三 六條郭の全盛

板倉侯洛中通行の日。攝家の女中乗物あふ時を。毎度斟酌
せらる。或日や。例の女中乗物へ行あひぬ。侯馬をどめ
づ。北の方あやと問ひむ。従者おそく。是ハ太夫あは
と答ふ。侯大は怒り。さぶく遊里を洛中の中央よおく故。か
る。いあふと。上お請ふて。郭を片隅へうつさる。六條
のころ遊女の全盛。さふくある。橋本經
亮話

四十四 傾城局の券書

此條兩談に載られバ省く

四十五 烟火城書畫展覧目録 上は同一

四十六 遊女より野ガ傳 附蟹の盃

野の傳を
兩談におくれ

ど漏せ。外
もあまは。孫
ぬ蟹の盃圖説
の。に。兩談
は。悉く。これ
就て。る。る。

橋本肥後守經
亮ハ香葉園と
号。正京師梅の
宮祠官より
守の典故に
ら。文化ニ
乙丑六月五十
余歳。没。著
著。梅窓筆記二

吉野没年ハ寛永八年。六月廿二日あり。より野は佐野紹益小
請出さる。紹益ハ灰屋と號。豪華なり。吉野ハ紹益小先づち
て死す

都とい花多に里。あまらり。吉野を死のあまらり。紹益
あまその時述懐の形あり。或人云。吉野が屍を火葬し。紹益
さづら。こまを喰ひ盡しけり。紹益がよ。あま。愛着せらる。か
らの如し。是より。灰屋の家。あまらり。經亮
七月十七日橋本經亮とら。榮庵を訪ふ。面會し。吉野が
傳を問ふ。榮庵ハ佐野氏。京都兩替町二條下ル所。住居。医
を業とす。この榮庵より野が夫紹益の孫なり。今おら。今
寒家とかりぬ。榮庵云。祖父灰屋紹益が家ハ。智恵小路上立賣
小何り。紹益ハ和歌をた。蹴鞠茶の湯。尾州紀

壬辰寄衣曼録

卷之中

曼三堂辛

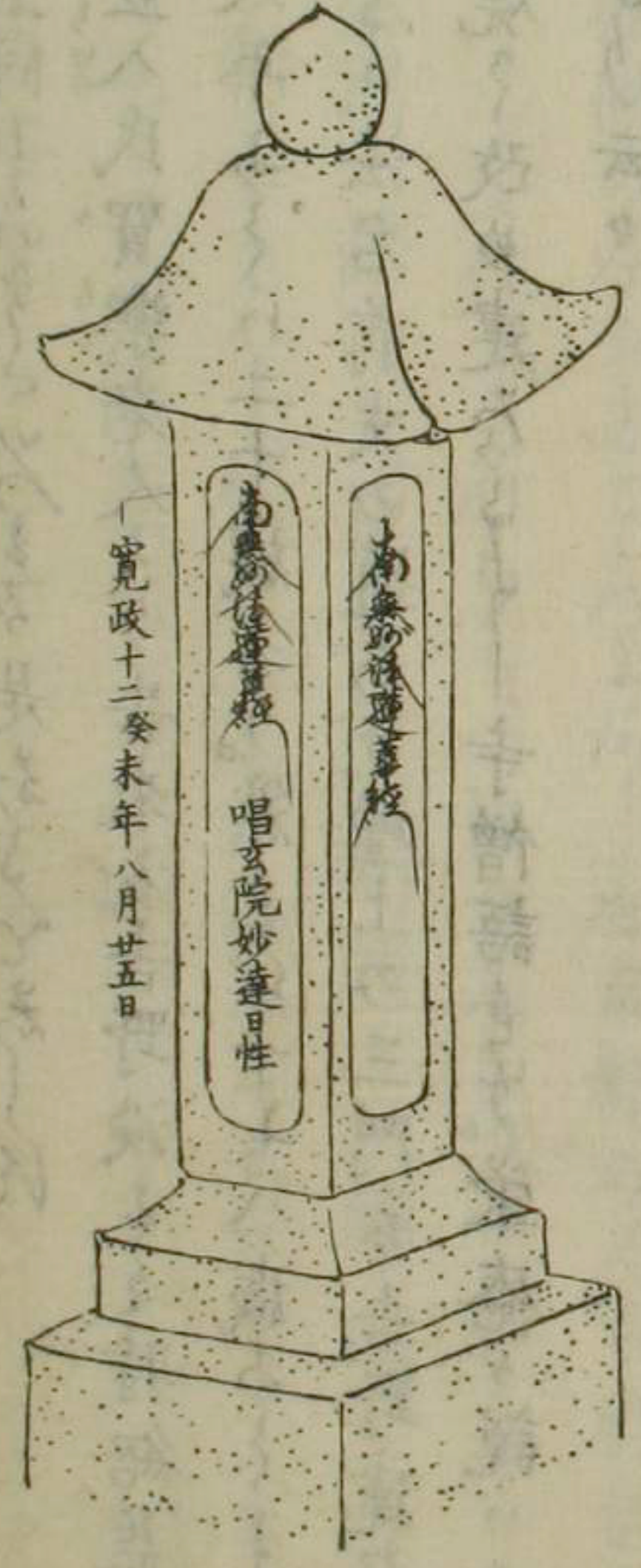
吟トてもあふづ

榮庵は紹益が歌のしと問ふ相違あり。紹益は貞徳と友と

畫工成瀬正胤の話。紹益より母でうけ出せし時。父は勘當せらるも。あむらう下京おはせと家ゆめめ夫婦住らう。父他へゆきしつらう。雨あつゆれかきし。此家に入りし雨舎りき。うちい爐お釜をうけくあり。主人をるや。あつて女房のいしうき。うき。うき。うき。請。うき茶うき出ぬ。その瓜もつま茶の手もまぐ所よえあまざるす。やとあしきよ思ひあがら立ちつらう。次の日あめくのみし人よかてる小。そもろろ子息紹益が妾あま。その家を紹益のかも家なりと告ぐ。父もめくさくうけく。そは奇遇と感悟し

遂に紹益が勘當とありし。よと野を引とりめ何ぞせしとぞ。程遠うね下京よ。その子の忍び居たりもあつて。うらな豪宮ありしことあふづしとあり。

友人盧橘は京師の人あり。近曾より野が墓を圖しをわたり。○吉野塚は洛北鷹が峰。日蓮宗檀場學堂の後よりあり。



寛政十二癸未年八月廿五日

吉野は京師大佛馬町松田氏といふ浪士の女兒あり元和四

追書

解按... 益... 草... 轍... ろ... 云... 小... 考...

戊午の年出生。行年三十六。崎人傳... 又洛の立入氏賀樂老人より告來る。吉野没... 歳あり。八年あり。二十歳あり。然も七十七八歳あり。野... 購... 火... 寺僧語... 栄庵が説ハ心得...

追考。嶋原の郭ハ。寛永十八年六條柳の馬場より。今の三筋... 町に引けあり。よ... 野を寛永八年に没せ。志... 予大坂逗留の日數... 傳あり。大坂盧橋... 寛文式二巻と閱...

あべー

四七 嶋原の噂

嶋原の郭。今を大おや... 曲輪の土屏... 揚屋町の外ハ。家も... 甚だきたあ。太夫の顔色萬事... 祇園の及ぶ... 京都の人々嶋原へ... 道遠... 人もも祇園へ誘引... 角屋徳右衛門が坐鋪... 庭等最... この庭の松甚... 紙... 水... 侍る。その外... 揚屋... 一眼千軒... 太夫を... 客ある妓...

一眼千軒嶋原の細見記あり

來る。大々大坂より来る。さうして大坂の話もあつた。

嶋原の燈籠七月よあつた。八月初旬よりそのときなり。予大坂

より又京へ来り。八月六日あり。昨日より嶋原小燈籠あり

とつた。一兩日大雨。終つて一覽せざりて京とさうぬ

嶋原よ麻子位とつた妓あり。さういふ江戸より一原のさう女郎

よおつた。半夜五夜
一夜十一夜五分

四十八 京師の妓院

京あつて嶋原の外御免の遊女町。五條坂北野。内野あり。五條
坂の何々や株と称す。又近年あつて御免許あり。祇園同
新地。二條新地。七條河原等あり。その外西石垣。上宮川町。東石
垣。下宮川町。古宮川町。六波羅野。御影堂。都市町。平居町。一
ノ宮町。三ノ宮町。膳所。富永町。末ノ町。新地。なまて。川を

先斗町。壬生。五むん町。七番町。三ノ石町。六間町。寺の前。下森。上
七軒。あつた女の辻。御靈。杉本町。野川町。大文寺町。先斗所川。ど
難波町。若竹町。新車屋町。九田町。檀王。等皆私窠。凡洛中半ハ
皆妓院あり。京の節儉。あつた人氣あつて。か多き遊のそま。小世
り。第一のあつた客。春他國の人三分二。地の人三分一。秋
より冬のうちに。地の人三分二。旅人三分一。ありと云。故に秋冬はさうし

四十九 祇園さう紙

祇園。祇園さう紙といふものあり。是ハ祇園町へもあつた。お
やま。けい子。おろめと称す。のり入のうま。さう小四許。切り札と
す。さうけい子。誰。おやま。誰。さうさうさうさうさう。茶やへ配る
茶やの勝手元。或はさうさうの上り口。さうさうさうさうさうさう。張つけあり。お
やま。藝子も。さうせとさうさうの別あり。さうせと。江戸より見場へ

扇九。一カ。井筒をど茶屋をたき何屋と定めあり。抱のげの子もあり。又おすへのげの子。別は家ありて住も何と客あまふ。必ぎそのせせいのふくや。子どもをを別はあり。是は祇園町中廿七軒。限りて御免あり。こもも通しをせとらふ。又もめてつとめよ出るものせ。腰元わりてつけおとらふ。江戸よ何あふもといふが如し。又いふお換りどんど何屋の仲居あり。あどもかゝるあり。

大徳家の内乗降凡そとて思ふ
ちのひ子

みー半

本詰

いのかり

三條通りさるるてつひま

中詰

いと
あつしや

振袖

あつしや

本詰とい。本どは眉毛ふ。中詰とい。中かまをなり。少は拘けいと云。祇園町のげの子げの子いふ。おやまの押りけいの子は勢あり。おやまの上坐をさる。初會の客よ孟まとさる。小客のくわく来さる。いづもかゝる。

五十 嫖客の噂

京を女郎といふ。女中といふ。おやまのつとめ。目下の人よりいふ。おやまのつとめ。夜五ツ或は四時ぐらよりおやま。花のつとめ。仕切を。相場をさる。花入用とも二割引あり。宿屋より引つける旅人。二より半引せ。半は宿屋へさる。銀相場を六十三夜通用せん。地の人ハ六十五六夜も勘定さる。京を現金の客をさる。うけハ五節句拂あり。そもも才

分ちんき方へ、勘定ゆるやうなり。夫ゆへに、
るふことありとふ。とてあつても損をさるゝの稀ありやう
但勘定をよくする所なり

(五十一) きがへの譯

祇園の客茶屋へゆはく酒をのまぶ。期よりおやまとよび
直よぬるを。きがへ申すこと。期は夜九ツなり。期あつて
も。きがへぬるを。きがへつふ。げん子おやまとよびやくと
つふ。晝を朝より暮まで。夜をふより夜明までかかや
あり。おれ日乃仕舞とのあつたあ。これやくとをねら
さるゝと何り。大坂も又おやまと。

(五十二) 藝子の枕金

げん子ふまてゝ金とあり。是はげん子の誰と通せん

おりの人。茶屋へゆはく酒をのまぶ。たのめ、茶屋その名もや。
あの子の相場を何程あつんとつふ。相場とん。たつて顔色や
きくうの。と名ある歌妓。すつゝ金二十兩。或ハ二十兩。その
次ハ十兩十五兩。つゝあつて五兩三兩あり。三兩より下な
るを。とてあつて金のやうに。二十兩のつて、金よのば
やとつて。ひさしよ茶屋へよびくあつたり。但あつて
小花の別よすつて。とて枕金の相場とつふ。仲居或は茶やの
娘。舞子も同様あり。

(五十三) 舞子の評

舞子を十歳からより十八九までわたり。歌曲も雅あつて。三
絃も煩い。とて。とてやうふさち舞あつて。とてあつて。む
の。白拍子が。朗詠あつて。ふ何とせと舞あつて。遣風あり

戊辰年 三月 廿三日

とぞおのまゝ。

五十四 三絃篁

げの子の三絃篁は。木地の桐のおあり。風呂桶の包む。三絃
ハジきもつぎ棹あり。故に箱を四角く横に長一揆袋
の棹のくまあり。盒のまぬきを用ふ。琴はらんきまふ包
と鼓はちぎをうさく携へ出る。

五十五 妓の衣服

衣服も。妓は紫の紹あむせうの袷帷子あむせうぎの色の裾すそうら。すそりやう。
或を上布かみちぎのくまびらとまむ。縹あまがらちりめんあまがらも有あまがら。
帯ハ赤あかきが多おほ。ゆりゆりの緋ひちりめん。○げの子ハ上布かみちぎ。ま
ちやちぎ。紫むらさきの紹あむせうもあり。赤あかも縹半あまがらと名なき。帯ハ縹あまがらは
縹あまがら子こ多おほ。ゆりゆりの緋ひのちりめん。まのめまのめのちりめん。緋ひちり

追女
挂窓云云ろ
ハジきもつぎ
覆て二戸ホ
ちりめんあまがらの緋
とつけらるの
とよあは

めんめん稀まれあり。京も大坂も。郭の外を。左のまありつぎをる。
らまをたりつぎのめ。是おう場あまがらのま。つら。そのつぎのま
くひののありありあり。甚おほ派手はてあり。五月ごご毎日まいにちより七月しちがつ十八日
いひあつめいひの帯おびをおび用もちゆもちらひらひのちりめんあまがらもひひおおのちりめんあまがら
とあひちりめんあまがらの帯おびを用もちゆもちらひらひのちりめんあまがらもひひおおのちりめんあまがら

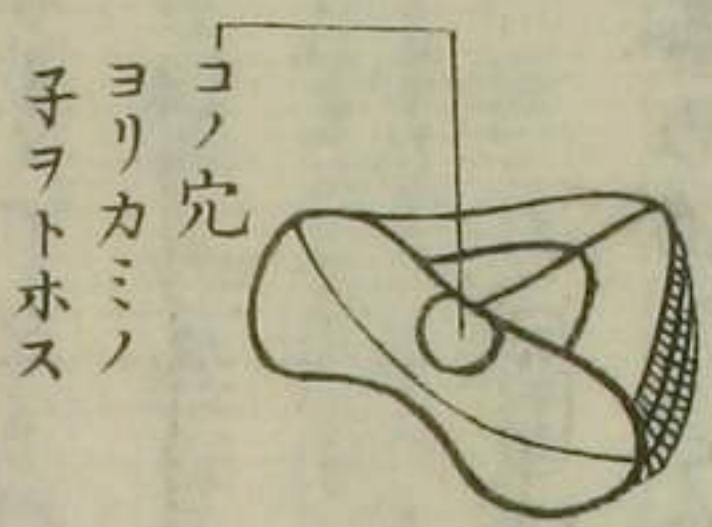
五十六 妓樓の夜具

客のゆくこゝの茶屋ちやうやまゝにあり。妓をがんこふまがくをりて
のち来り。閨中ハ江戸染のゆりゆりをおび用もちゆもちらひらひのちりめんあまがらもひひおおのちりめんあまがら
扇あふぎ。うちまゝいろぬきあり。草團扇くさだんせんをもつ。郭くわくの揚屋やうや祇園ぎおん町まちも。夜
具ハ郡内ぐんない縹あまがらのうまうまれたんあまがら一ツあり。大坂も祇園ぎおん新地しんちハあこ
織の蒲團ふしど。茶屋ちやうやままより木綿きわた夜具よぐをも用もちゆもち。太夫も伯人はくじんも夜
具よぐを皆みなかくのぶ。

五十七 京の女兒風俗

壬辰年 三月 廿三日

京の女の風俗。髪をあげらるゝものにつけ。髪を上へつて上げ。鬢を甚あつて出さ。日びのむらう。山さづつりつり前へたあつらけ。島田をまんを入き。草をねおま。髪のもつた太きすうつを紙よく巻き。うらめやねつるどのもつて。



まづがら一寸半ふきうてあつらうのあぢいあぢいのつまげの



つとらうのいそもくたまそつらもあ髪あり

まづ大坂名古屋伊勢つづもこのつひあ。大同小異なり。大坂も水髪あつて。鬢くさうり多く油をつま。いせの丸く。名古屋の似く非あつての多。京都の地の女も髪の方。妓とわらうつとあ。これ商人と妓と。うち混と居るなあり。化粧のつまもあつてせうなり。櫛の厚き高時繪のぬり櫛あり。大坂のつま。笄の鬘甲あり。数本まけつた。今年制禁ありて。三本の外はさつて。鬘結のあつてはあ。のちりめんも今年禁制せつてより紙をさつてあつてのさつて染るる鬘結と用申。以前ハ髪の上。数十金を費せつてあ。妓を紙入ふ紙のつまの鏡をつけ。白粉をちひまある。あつて袋よ入。席上あつたびけつてをまるをうり。けの子ハ巾着とつけこもを帯のうらうらう入。あつてこの袋の中ハ化粧道具

の... 又茶屋の唄を... 江戸吉原... 茶屋の亭主を... 男女の... 歌も... 文を... 小唄を... 今祇園

祇園の歌曲

今祇園あ〜りのつら〜る小唄を人の〜び〜

あ〜小〜る

扇手びやう

二よりこれの... 扇手びやう... 三日月... 二月... 一月... 下ま... 人〜ぬ〜る

同手びやう

同手びやう... 月... 乃...

同扇びやう

同扇びやう... 扇手びやう... 同手びやう... 同扇びやう...

いたちあふ——ちうごう江戸
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——
 孫に孫でけし——

おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、

おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、
 おかしな事があるやうに思ふ。江戸の事、さういふ所は、川とせう、

御所うら

京あしく世付ある。妓樓と。繩手。二條新地。北野。内野。御所うら等
 あり。こもりあつてしむせも。りぐも。賤妓うら。又せいう
 ちつけ格子畳ころり小三四畳と敷べし。二條新地尤多し。御所
 裏いむし御所の下主女。夜行し色とや。今ハ、
 しのいかにと。五條坂等も。

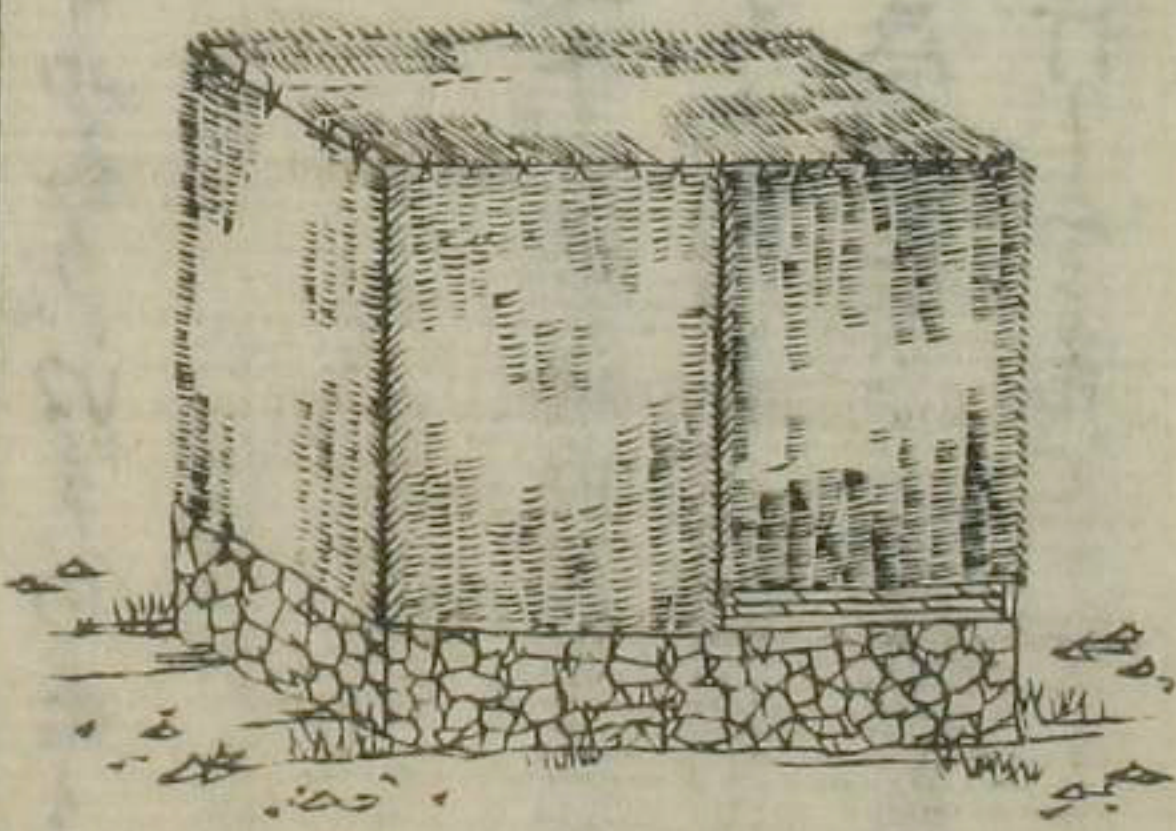
先斗町は。いふこと。称する私窠あり。さげらうとも名づく。
 むら——さげらう——やうらうの妓を出せ——といふ。今猶先斗町の北
 角小綿帽子屋あり。此綿帽子を旅宿へもまね。又う——生補二月

雇ふもよきなり。價つゆに醜婦あり。その名を雅よきと云。さ
 づく旅人逗留中。一ヶ月小金二分を費せば。一月雇の妻あり。その
 者飲食を給仕し。又縫刺の事をせし。夜を枕席をまきむとのみ
 是を素人あり。この地尤荒淫あり。太夫天神の外は房中帯はし。
 こも衣服をいづつ申あり。太夫天神のちりめんの志はれあり
 と云ふ。大坂又うくのどく

(六十一) 總嫁

總嫁を二条より七条
 まてのまきへりづる。
 河原よむらうのまひ
 しづくあき夜合星

惣嫁の小屋



河原の水は所よ石
 と高くそのうづ
 ひらうとひ三尺を
 まらかりひらうと
 らざし七又夜は小を
 をうける惣嫁の川を
 ねふたさき居て
 往來の人をひく

(六十四) 四條の芝居

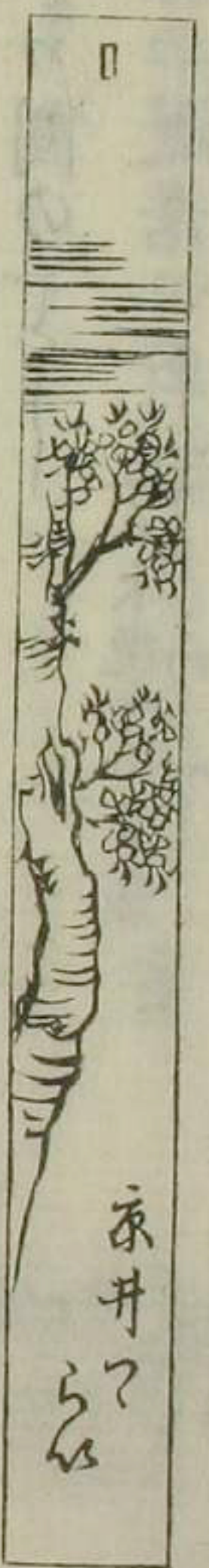
京ゆく芝居初日の前日あり。小路へ太鼓を廻さこく江戸
 の角力の如し。太鼓を大太鼓お何とてんくうりくとある
 ものあり。芝居を朝やぐ太鼓
 の先は棹紙をさうつけ。役を
 書あきしてあまを荷ひあり。その
 うくち圖のどく



四條の芝居二軒江戸木挽町の芝居看
 板を江戸の人形芝居のどくむも
 奇麗あり。芝居のうち小廁あり。花道の真まきふつけ、つき
 何さう小切幕あり。又舞臺の左の方よも切まきあり、役者
 あらうりも出入を。切落のうつ小篁の子天井あり。切落の土間

あり。大入あまびこの所も棧敷並もある。上下の棧浦を江戸
 よりも廣く。下側九間ほどぎん。棧浦の向ふづらりり形等河
 りく江戸よりい立派あり。棧浦の柱を桐の聯とくける。是の
 祇園のげん子あやまよりわくわく物あり

まじり
 きりの
 ん



桐の本地の板へ
 とありのてを
 さのての画あり
 下つけのてあま
 の名をて

幕を横布あり。水引の四方を張るあり。二階までたの上よりあり引
 あり花道を十五六年以前まで土まき築あげあり。今
 の江戸のてく板
 如此ろぬりの屋んとうまき入とこれ
 へ腕をてく持て来る茶らて番
 附等うるとのい皆十四五歳の童あり。雨天の日の茶屋の下女
 草履を持来て客よておき。大切りよ又下駄を持て迎ひよ

来る。又客の貧富ふよて一幕く下女来りて用をさん。

芝居のうち小廁あり。見物のりの外へ出るふおまき。又闘
 争の愁もふ



かくのてき桃灯を棧敷のおきて
 の方のまん中へ昼よりかけくお

あり。こまの朝棧敷がてまの直よその茶屋よりかか
 とくて。凡芝居の弁當は焼飯握りめ。いふ。京も大坂
 も雜劇と妓院と打混ぶ居るお名芝居の仕出も多
 祇園の茶屋より仕出を。芝居茶屋といつもの別よ。初日
 より四五日までのうちげん子あやま等何てあて。一日
 もまやてるものを全盛とさる故に當分の棧敷のうち悉げ
 の子あやま多し。妓を必ず客をねづる。か妓は十人廿人講を
 むまびく自分あてるもあまて見も多し客をねづるなり

追書
伏見ありて
高槻喧嘩を
組る狂
言あり大の
狂言を高槻
騒動と云

まづ舞臺のあらげと役者の衣服を江戸より立派あり。その外を替るあり。予京より時七月廿四日より四條北の芝居より。團藏。嵐吉。嵐吉三郎ありこの時の当浅尾工左エ門。嵐三五郎。嵐猪三郎。嵐吉市川團三郎。前髪を浅尾國五郎。尾上新七。鯉三澤村國太郎。甚老中村金藏。芳澤いろは。女形市川團之助。園子等して繪本太閤記の狂言あり。切狂言は伏見の喧嘩を。新狂言三幕まで。嵐吉三郎足輕里見伊助の役評判尤く大入あり。予八月七日大坂よりゆづりけよるおと。京大坂とも芝居より。以前先づ板に役者の名と書つて。木戸より出で。江戸のあやつり芝居の。是ハ一ト芝居。小役者入るものあり。近年京も四條二軒の芝居一所より出来。うづり小興行を。或は京のあやつり狂言と

役者道具建との小大坂へ。又興行する。大坂の。近年三都とも芝居。おと。役者多く大坂に住居。おと。家作より。この外におと。薬師。御靈邊所々小芝居あり。大坂の中芝居より及む。葎蕒張多し。

(六十五) 京師の評。附風俗の圖説

夫皇城の豊饒ある三條橋上より頭をめぐらして四方でのぞくと。緑山高く。加茂川長く流る。水きよらあり。人物亦柔和あり。路をゆくもの争論せむ。家よりあつるものを罵らむ。上國の風俗事々物々自然に備わら。予江戸小生。三十六年。今年より。京師に遊ぶ。暫時俗腸をあつぬ。

京よよはるものニツ 女子。加茂川の水。寺社。あききりけ三ツ。
 人氣の吝嗇。料理。舟便。たしむるもの五ツ。魚類。物ゆひ。
 よはせん。茶。よまき。實ある妓女。

京あきり雨天も合羽を着せ。合羽を着せば人必遠行せり。
 おりり。こも雨の横よふべまつ直に降るゆゑあり。げん
 ろりの商人甲掛脚半をつけ。帯を後よくあはる。おれりとの
 や。おんもんや。おどよびあはる。これもあはりじ
 車を牛よひり。人引く。何れも。一人先よまきと繩を輪ふ
 して。肩おさし入し。おまきをひく後より押さりの又声をよまき
 名古屋いせ 又うのいし 雨中傘をさして。駕をうづぐものあり。予伏見より
 京よ入る時雨あまきり。予が荷を持し人足傘をさせり。凡八
 九貫目の兩がけをかつぎあはる。傘をさして三里の道を

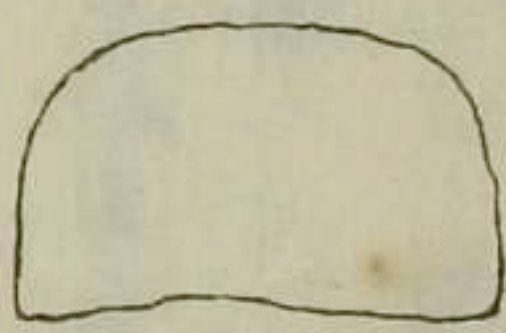
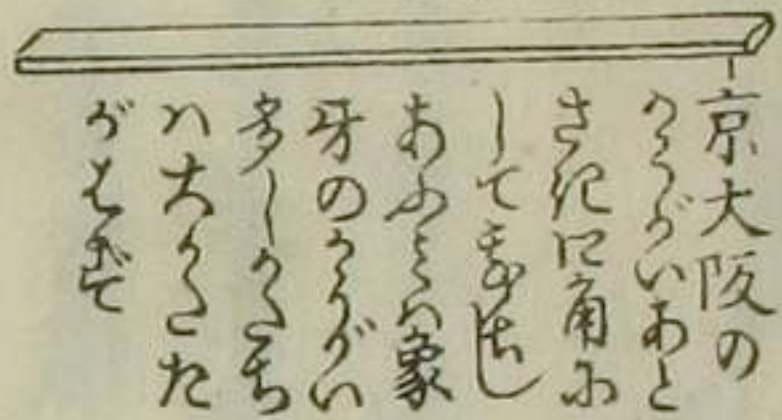
ゆきし。江戸人のめあをめぐら。京の輕子ハ甲うけ脚半を
 つけ。帯をしめ。三尺手拭をさめる。俠者も額をぬら。月代の
 毛を長くせむ。身よ花繡あはるもの一人もあ。大坂の髪結か
 けあり。せろこあし。おれを箱あり。或る一人ニツの箱と擔ひ
 一人あはり。とよびあはる。大坂も又うらものごと。
 男子の羽織二尺よ過ぎ。大坂を羽織のきり。夏を白張の日傘
 をさす。菅笠をかあはる。医師を總髪。画工の髪あはるの多し。
 髪を海老尻鬚



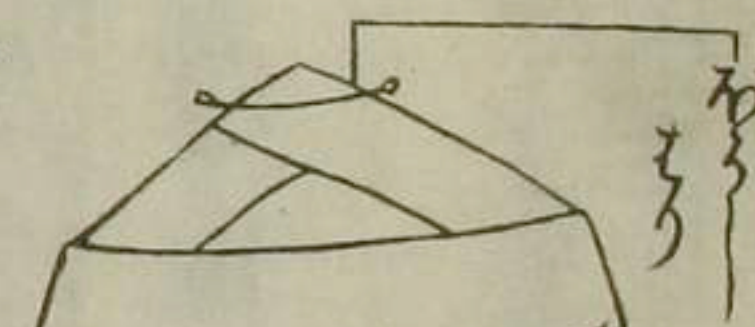
ねをゆきし。とよびあはる。大坂の髪結か
 けあり。せろこあし。おれを箱あり。或る一人ニツの箱と擔ひ
 一人あはり。とよびあはる。大坂も又うらものごと。
 男子の羽織二尺よ過ぎ。大坂を羽織のきり。夏を白張の日傘
 をさす。菅笠をかあはる。医師を總髪。画工の髪あはるの多し。
 髪を海老尻鬚

又醫師の惣髪を髷をう。かづら下地のうらまを女子を他行よ
かゝるくま帽子をかざる。衣服その外女子を赤きとせよ

「京大阪の
うらまに角お
してまはし
あふり家
牙のうらま
多しとら
ハちとこた
がとまそ



「京大阪
のうらま
つゆふ
用ふ



「京大阪
町家の
婦女ハ
二十以
下ハ中
うらまを
用ふ



「京都ハ木
まはる青角ハ木
あふり大坂を
づらうのうらま
象牙の本地まはる
ゆりぐらハ
サキあり

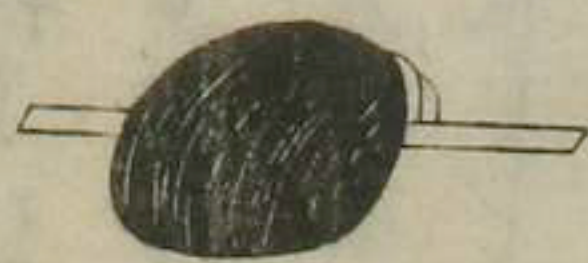
「一寸半
まはる
あふり石壇
びくおも又
かろのうら
かろ一書女
なり



「老女ハ黄

「女隠居武ハ丘尼
のうらま

うらま



「京大阪のせうのうらま
うらまより黄とら
りとかわらまあり
江戸のうらま
うらまのうらま

「一寸半
まはる
あふり石壇
びくおも又
かろのうら
かろ一書女
なり

「女隠居武ハ丘尼
のうらま

「老女ハ黄

「京大阪の
うらまに角お
してまはし
あふり家
牙のうらま
多しとら
ハちとこた
がとまそ

「京大阪
町家の
婦女ハ
二十以
下ハ中
うらまを
用ふ

「京都ハ木
まはる青角ハ木
あふり大坂を
づらうのうらま
象牙の本地まはる
ゆりぐらハ
サキあり

「京大阪のせうのうらま
うらまより黄とら
りとかわらまあり
江戸のうらま
うらまのうらま

「尾州
勢州
辺眉
毛あら
女のうらま
うらま

「大坂
大坂の
今ハうらま
ゆらま

「京大阪
のうらま
あふらま
つゆふ
たまわら

「尾州
あふらま
あふらま
むらま
あり

「いせ津の辺女兒のうらま
ひさし口まはる
ありやう
ありやう
ひさし
ひさし

「大坂
大坂の
今ハうらま
ゆらま

「尾州
勢州
辺眉
毛あら
女のうらま
うらま

「大坂
大坂の
今ハうらま
ゆらま

「京大阪
のうらま
あふらま
つゆふ
たまわら

「尾州
あふらま
あふらま
むらま
あり

「いせ津の辺女兒のうらま
ひさし口まはる
ありやう
ありやう
ひさし
ひさし

「大坂
大坂の
今ハうらま
ゆらま

「尾州
勢州
辺眉
毛あら
女のうらま
うらま

「大坂
大坂の
今ハうらま
ゆらま

「京大阪
のうらま
あふらま
つゆふ
たまわら

「尾州
あふらま
あふらま
むらま
あり

「いせ津の辺女兒のうらま
ひさし口まはる
ありやう
ありやう
ひさし
ひさし

狂哥
かく斗火をととのせ山のたのむを懸のうらまぬあがめありけり
おあーせうふねうら火

畑橋洲子

法印医学院畑柳安男
通稱柳泰好詩文

の話ふ。東山大文字の火を。延徳元

年七月十六日。將軍義輝追悼の爲どもめてあまをあと。あま
冥土光明の故あり。義輝前年正月十六日小薨也。故ふ今年初
てあのと何り。大文字の筆畫を茲船庵の筆也。そのと今出
川相國寺の傳記ふらる。世は弘法の筆。或は横川の筆と云
りのいふ誤あり。相國寺日件録も何。あはりのい抄書せるふ
やこの事とつゞ。今現は相國寺庫藏中の日件録といふのと
何りとのつゞ。甚ど珍説あり。予先年著述せし俳諧歳時記に
ハ横川和尚の筆とある。ぬ。今ふ至る。送恨まらるらざり

しふ。うら日又橘洲子より文通のつひで。大文字火の事慈
船庵を存し違ふらる。相國寺小補軒横川和尚へ足利

將軍命せらる。あり。小補軒當時荒廢遺趾而已也。下略かく
申参りたまふ。世間普通の説あり。めづらからざ。大い息を

うらあひぬ。大文字火を十六日夕方より同時火を点せ。誠一時の壯觀あり。こ
らあり黄昏雨やぬ。あまも今夕大文字火を点せ。十七日の夕火を点せ。そ
の餘を十六日夕方あり。葺き薪をつまむ。一時は火を点せ。當時ハ
農民の山すつりなり。火を点せ。あまもあまも下る。

允精靈のむらひ火おつり火を。あ加茂川。あま。麻がら小火を點
せ。お宗旨ふらる。日限の遅速あり。盆中家。よ挑灯燈籠と
出せ。江戸の如し。東山諸寺の高燈籠を星の如くあり。

(六十八) 六道の植うり

七月九日六波羅及六道の植うり。江戸人といめづら。植を高


野植あゝ



多分の人必ぎ一枝づ買ふ持
佛の花つけしき。江戸のあゝ

盆の草市といふものなり

六月十九日

七月十日清水の四方六千日といふなり。此邊までとあるを
餅を賣る。これハ挽餅あゝ白と黄あり。形  かゝる
どくねらる。音羽の瀧のあゝ糸のしとゆる。淫曲よりあづけ
たるもや

廿七 京の盆祭

京まで盆まつりといふことあり。江戸のいゝあゝあらば。
魂棚も机やのものを設け其で麻畧なり。さげのものもろ
り。せぬ極のようなり。十三日よげのちをよゝらるるあり。



それも稀なり。盆中囉齋弱法師のたゞひとゞ物りゝひ末
らど。但六齋念佛ハ大勢あり。なり。さうある佛ハ江戸の農民も大衆
いれあをさうさひ市中をあり。すげ。京まで女児の盆まつりといふ
ことあり。今年近國洪水ありや沙汰あり。街道
の女児五六歳より十二歳まで大せの手を引あひ。源氏目録
のさうたあゝうたあゝあり。江戸の盆まつりたのにおゝ。
是小町おどりなり

まべゝ京を五節句あゝも。中人以下市中あゝをいふ。式といふ
て膳部を設け。正月も市中松をさうをせど。餅を
つけども。元日只一日汁雑煮をいふ。鏡餅を江戸の廿四文備へ
る。どのまわり只一つと。萬事の費をいふことと儉節ま
たりといふ。

(七十一) 内裡の御燈籠

七月十五日禁裡の御燈籠を拜見ふすの事。此日ハ諸人の
 るきれ禁中へまつるなり。清凉殿の廂ひび御燈籠をなす
 前後警言固の役人付そひと一二間とありより拜見すむ。
 らの日を紫宸殿の御門もひきまきとあり。是南門あり炎上後
別南門あり諸
 人うちを拜して賽錢を投るものあり。日の御門諸人いよ
りうちの外
 小茶店あり。檜垣の茶屋と號す。又公家門の前の茶店を檜
 垣と稱す。この江城の下馬先のごとく。茶店を甚むさるるけ
 まど。その名をおめづら雅なり御燈籠いひるの人の形造り
 花ふどらありあり。下の臺ハ四角ある燈籠あく白きかみを
 まり。上ハ赤と青との紙をつけ。是を四方よさげをり。火を下
 とのまあり。燈籠いひのり下ヶ札して。親王家攝家の名を

ある。又女中方と何れもあ

り。つづもさけのとも。

翌十六日とあり下さる

とあり。あぬのあぢちも今日と
ろうと法んよんせむ

日の御門この日ハ時ごら

ひらに。七ッごらふ閉る。七ッ

過てい拜見をゆとむ。

消息して。禁裏御所御燈籠の造り花あり四五本わたりこそ

またり。誠よ一度

敷覽をへる品あまふ。おとまき尊むべし。京の町よもよ

所縁あまののあねが拜受まこと何れもいそとてこれら

やとけり。京の俗の説よ。こまを家よおけを賊入らどこのふ



(七十二) つまらうたう太

両津ふちくれが者

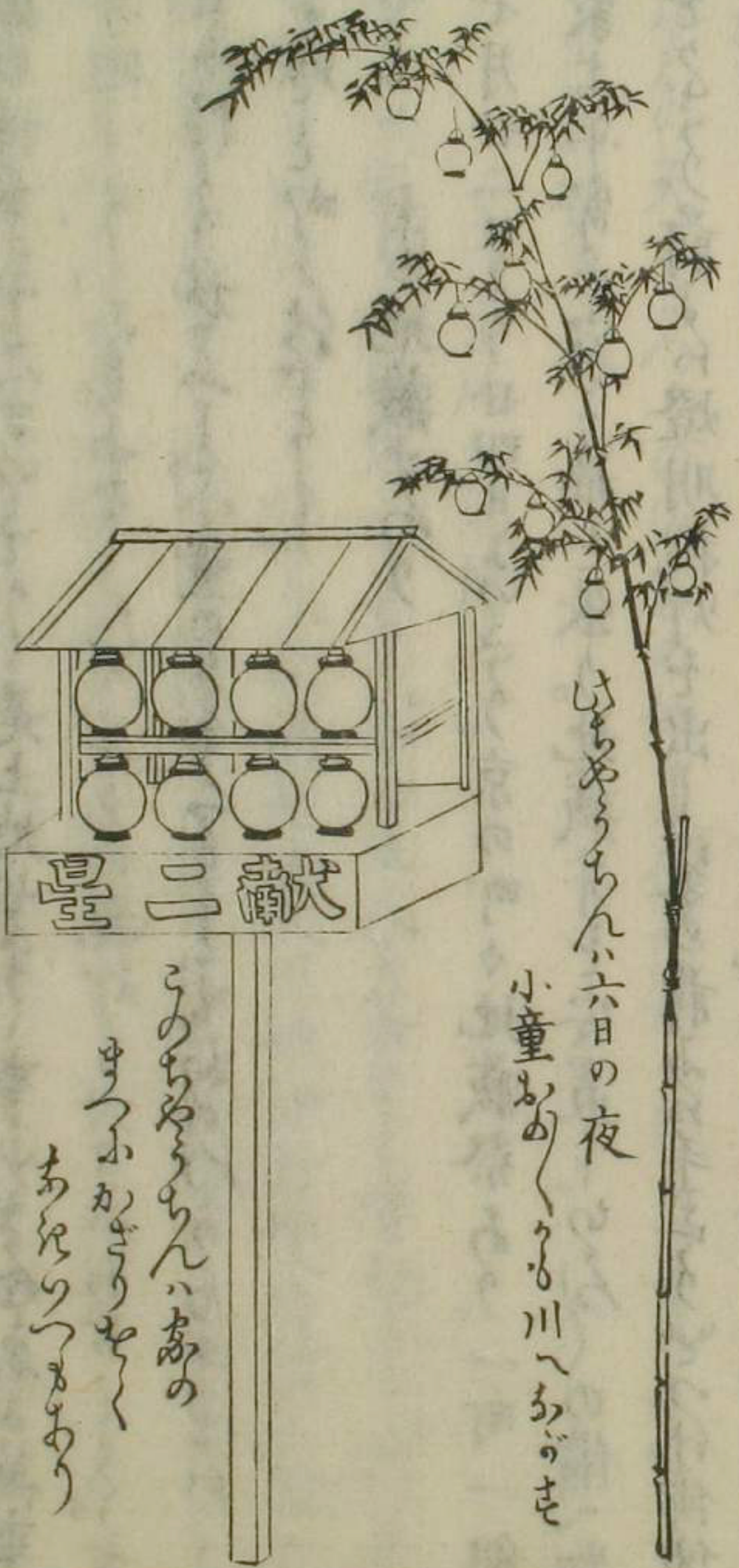
(七十三) せんぞ萬歳

これも用

(七十四) 京の七夕祭

京おと七夕の星の手向ふ。ちひまに鬼灯挑灯をいっつとも
 あく笹おうらいつけ。小童六日の夕々ここれをも長た竿のうらふ
 結ひつけ。そ結手迹の師の家の前よのちゆた。暮て加茂川江
 のち出こもを流と。二條五條の橋の邊へい流とくを禁と。
 故よ二條四條の河原に數十人件たぐひの挑灯をとりのつとたあり
 さよ。まをうら星のふらうたう。短冊に哥を書き笹へつら
 ても何まど。つづも挑灯を附ぎるいな。又を七月二日三日ご
 ろより家のまふ小燈籠を出し。これ小獻二星あは結字をうご
 りふうた。上よ小なる挑灯を十四五つもく出いたたもあり。

そのうら



小童あめくも川へあがま

小童あめくも川へあがま

このちひまに鬼灯

ちひまに鬼灯

あは結字をうご

二星を祭るの挑灯。七日の夜あがまこ。六日よあがまここのい。
 京の風俗なり。さべく京ち五節供の諸拂等。昼の内よかづつ
 け。ごりふあさるかげの持ゆた勘定。當日夕方を俗事。

のくらむ斤付を夫より遊ぶなり。歳暮も富るもは廿四五日。まづ一たりの廿七八日まで小悉く家事せしむる。正月のことなど大く設けたり。大晦日を閑暇にして、今夜祇園けつり楸の神事あり。是土地せうし事少きゆゑあは萬事手廻しよし。あまふをひひ。七夕の挑灯も六日小あがり。七日をねよりせふ。小童のさきふも。木のぐり手まひよはしとかりたり。

七十五 地藏まつり

七月廿二日より廿四日まつり。京の町々地藏祭あり。一町一組家主年寄の家、幕を張り、地藏井を安置し、いろくの備へ物をふり。前より燈明挑灯を出し、家の前より手とりつけ、佛像の前を通夜し酒とり何とせり。
活花、扇、けその外、善物を下つめ、種、は品をとり、家毎に飾り

どく町年中町内のひ合せも、は日おまる。そののりまもあり。江戸の天王まつりの飯宮の如し。伏見邊大坂よのりまも、こまおあ。

七十六 京地の酒樓

噲々が家も今猶東山あり。今の主人も茶を嗜む。門柱の聯を片竹を以てつく。我酒妙々天下妙。伊丹雙白價不諭。の數箇字をあらたり。その外のも、板面派滅してよめ。あゝ、みんあやの田樂名物あり。噲々が時のんや、一種ありけり。今ちこのめ、外の料理もさあり。○祇園の梶子が茶店今ハ跡あり。○大雅堂ハ、東山雙林寺中長喜庵の向ひあり。是を七八年前に建し所ありとぞ。料理をして齋く。瓦のハ大雅堂の三字を篆して、家の作りも甚だ俗あり。案ハ相

噲々堂、名ハ謙字ハ貞吉、池大雅堂の門人ありて、書を能く、又画を好み、頗る風流の人ありと云

違へて人小問ふ。むうの大雅堂の祇園のかささら小なり
しが類焼せり。今のあるトを哥妓あるう。空しく大雅堂の
名をわらうとの。いつまよ家作二階等の物数寄。その俗ある
し丸山の料理茶屋よおせり。

○丸山の料理茶屋の何と。法師お肉肉食妻帯あり。い
づも何阿弥と稱と。座敷庭奇麗あり。料理もよ。浮瀬の
かきうへ僅小一軒あり。大坂の浮瀬を猶繁昌せり。

○生洲の高瀬川をす小あてたも。夏とど。柏屋松源ふ
ともや。柏屋を先斗町も出店あり。松源近年客多。あ
まゝ鰻鱧あゝひ鯉名物といふ。魚類を若狭より来る塩小鯛
塩あひび。近江より来る鯉。大坂より来る魚類。あつ
多く腐敗と鰻鱧。若狭より来るもの多。あつとも油つよ

く。江戸前よりわらう鮎鮎。加茂川あつともお疲て骨こ
そ。鮎しほいよ。若狭の焼鮎よとつども。岐阜あつら川の
年魚あつともあつら。野の口あつらの中味あり。鯉のあつらも
白味噌をう。赤味噌をあ。白味噌とありの塩氣うま
甘たつら。そらあつら。田樂つら。この白味噌をつら
お名江戸人の口あひ食ひ。鰻鱧の大平や。小串
い焼く玉子とちよもせり。大魚の焼物。必片身あり。皿下
ふなる方の身をそら。外の料理よつら。大坂も又
ら。京の魚類よ。土地を。大坂
あつ片身の濱焼あつと出さ。つら。足おのづら。費を
まぶく人氣のあつら。京の味よ。麩湯
皮。芋。水菜。ら。その餘は江戸人の口あひ。

○祇園豆腐を真崎の田樂よ及ぞ。南禅寺豆腐を江戸の何
と雪ふもかきとせり。あつても店上廣くして。いづれも志記
り。それ奇麗あるは江戸の及ぶところふ何れもさきべて京の
茶店ハ。四方一間位づつよあきり。左右ふまをれをさげり。古
屋の七ツ寺の酒店
もあきとせり

○祇園よ孔雀茶屋あり。ゆるゆるの名鳥多し。名鳥やの各字ハ暢有
を年孔雀茶屋と書

○大佛餅を江戸の羽二重のちふ似る餡をころろつめり。味ひ
甚ぞ佳なり。ゆるゆるちまひといふもの。黒砂糖製あり。よ
かき。その外安のの。挽米のやねのちあり。上菓子とよと
つども價大よ尊し。

(七十七) 河原のよきみ

納涼を四條二條の河原より。四條よハ義太夫或をよせりの名

ゆるりあり。二條河原より大弓揚子よせ物もあきと四條尤
あきとせり。あつても河原を昼は炎暑ふ石やけく。ほそり
つどもさめむ。流き水もあき。人さきあき。かつりて二條四
條よまさされり。乳おも茶屋酒店等川よ床几をちし。秘の料理をひき
く四條二條を茶店のよきり。納涼の人亦あをちあり
て河原よゆるゆる。京師の人を遊山よあきら。亦あをちあり。
あききりのの巾の皮よ梅りめ。つとてゆめに店物やくら。只店上の
りのをくらあとの旅客と祇園は漂客のよ。ちあ小物よ。茶店は
茶のよき。一人のよ。茶代をくら。あああり。清水智恵院
ちあ茶店。ちあ湯ふ。ああり。乳のよき。い
よき。あを茶店。い。是を記をくら。

(七十八) 京都の節儉

京よて客ありて振舞をきくらふら。丸山。生洲。或を祇園二軒茶
屋南禅寺の酒店あふ。一人よ價何文と定め。家内せよと
称し。それ酒店に伴ひ行。是別段よ客をもよその儀ふら
ら。家よて調理され。萬事よ費あり。その上やよき器

物をうち破るは愁ひあり。故ふかくはぐくも。京の人の狡ふるくは是よて知るべし。

洛外の古迹 附近江八景

七月七日。あけさ紀の上賀茂北野へまのまゝ。北野あり。

思ふふしかふうつてねきまつる木のまゝの筆梅の枝は抽
帰路千本あり。雷志くかたりて。夕たちぬまへづふぬまゝぬま
てかりぬ。

○下賀茂於明神ひたの木の多し。志願成就の人ハ必ぎこの
社頭に於をたてまつる。たゞ餘の木をもてきて植るといつど
も。程なく化して於とある。予七月八日賀茂に遊びくるに請ふ
て。いつくの半於に化したるを一枝手折るかりぬ。そは外南
天つこの於に化してるも何れに。或は枯き或はのあらば

於に化したる故手折らざ。かゝる神木をいづらふ折らんおと。
かゝるおにやしも何れねど。携へかつてそは奇瑞を人々え
せむを。遠き何れも人もいづ信をまさんとうたぐひをすけれ
ば。此うを神ふつけきりて。こまをまらまら。

○七月九日宇治へゆ記たり。今日上醍醐下醍醐邊稻荷山。おの
森深草。東福寺。黄檗あり。道まがら一見を。八幡山崎邊洪水よて
いづ道甚あまたり。宇治橋を三段小切きて落。通圓の茶店の
床上四五尺も水つきしと見え。興聖寺。平等院。洪水あり。路難
儀あり。離宮を高さ故水難あり。橋姫の宮を流まて跡あり。

○和泉式部が稻荷山あり。古歌をぞりたり。このあめりこわい
山上七八町あり。の谷間あり。古木あり。地理を思ふよ田中の社

のかつりもさか何もさか昔は木より何くさるべし。

○七月十一日嵐山に遊び侍り。渡月橋も近日の洪水におちて。川上七八町までくく渡り舟あり。大井川の石及び紙屋川の石など。さか拾ふくかつりぬ。秋暑ふたえなれば。終に佳品を得ぞ。この辺の石細長くして 丈鎮とあまべた物あり。

○嵯峨あつらふまじりたのれ。廣澤の池とあつらふ山あり廣沢ハ佳景あり。嵐山を絶景として侍る。

○さかた洛栲舎を。二尊院より四五町間道敷の中より侍り。土人もあらざ。今をのりる人もなかり。その地主も農民の得とある。座敷二窓。勝手一窓。もごらづまたり。

栲の樹や月もあつらふの。八瀬大原の黒木より。鞍馬のつらめと。

○さかたつらめたの。八瀬大原の黒木より。鞍馬のつらめと。

落栲舎ハ俳人
去來々住ハ草
庵ありとの名
ハ兼時ハのふ
長崎の人向井
元升ハ二男ハ
て若うりて
洛お住ハ芭蕉
翁の風流ハ
学ハハハハハ
小名あり宝永
元年九月没
とふ。

大原女のさうさ脚半を。むくふさのさ方あつらふ脚半を何れせとくかり。女の牛馬を牽くゆきさるさま。まごめづらし。

○さかたつらめたの。東西の門跡あり。奇麗莊観言語同断。誠ハ美盡して世界の金銀もくふあつらふかどうくさる。さうさ下も黄檗の雅ありてさびたるよめおさる。

○さかたつらめたの。禁中ハさうさもさ。上下加茂の社。公卿の参内

○さかたつらめたの。うつき着たる女。

○さかたつらめたの。たごさの四洗井。うも川の流さ

○さかたつらめたの。さうさるさ。暖湯をわく。さかたつらめたの。うつき着たる女。

○さかたつらめたの。うつき着たる女。

○いん麻らあつらふ山の麓大堰川あつらふさうさ。いんさかたつらめたの。うつき着たる女。

○鳥部山と。今もあまもきなり。此邊袖を多し。御廟野もいよきみし。東西の大谷甚立派あり。

○ある谷越を。つも山水山路小流も出る名の如し。

○妙心寺の松を甚ざよし。四方の枝をうつと十四五間あられども。つし。傍の松もあまもきなり。

○鹿苑寺の金閣を甚ざ古雅なり。義満の像生るが如く威有り。よれ石あまもきなり。瀧をこころし。を園おえの老一人より十人俣ふ投ども。いれ。庭の門をひらく。赤山浪閣もあまもきなり。かゝのこころし。

○智恩院の傘を今猶骨むろりふなり。本堂を右宮の方の軒下より。

○大佛の鐘も大々れど。智恩院のうねまきもなり。かゝらひらくく。雅あらむ。鐘の響よれ。祇園是第一なり。

○大佛の焼跡。その大さをえんし。柱のうかとの礎と佛の臺坐の。耳塚をえん。昔をやどらる。太閤の廟をえん。昔をえの。いと侍る。この辺町家のうらふあ。繼信忠信の塔。苔むて。いよあまもきなり。

○三十三間堂の観音。諺の。とく。数多し。

○高臺寺の萩を。大坂より帰路京ふ来り。一時なり。

○近年京あまもきなり。神を。赤山明神と。深砂大王あり。赤山六敷山の。麓さ。越の丑寅三四町あり。深砂を上醍醐ふあり。此神去年開帳。己来の。あまもきなり。神體鬼形。画幅あり。是三十番神の。あまもきなり。祇園の。あまもきなり。子奉納の。挑灯。あまもきなり。

○七月十二日小倉山に遊べり。楓もいよ。青とが。あまもきなり。

一木ふと木梢の少一色つれくるをやり手ぞうと笠まつけ
たりふ道まかててうまひぬ

まて京都の神社古迹等を古人もこれを抄出し。又近ごろ
都名所圖會とのふりのお圖説らるるれがこふまきん。只お
のまごころふよとかなりのと。少くも付おのり。

○近江の三上山を出來のころに小富士あり。比良の
たちへくつり。叡山愛宕もたうくも。

○七月廿一日未明に木屋町の旅宿を出る。この頃の松尾ふゆ
きけり。吉田の神社を乃まぐらね。白川越ふり。峠ま
湖水を眺望す。白川の山中河々まく石をまき
出ま世より白川石をれり。

ハ、糸やとほくもるわと秋のいろ

凡そ湖水をよもゆで予がめふあや野の佳景あり。就中白川の

峠よりこまをのぞくとま。左小若州の諸壑遙よそびへむうふ
よ伊勢近江の山々波濤のぞく。足下ふかさを又かろし。左小
三井大津粟津石山等もゆ。矢走片田の辺。晴またる日をかす
くふ浮御堂もつるべ。魚ももまふ及びがく。述もとも詞
よまをまのこつて。湖を浪まづうふりて席を布るがおよく。
船を帆をあざく一葉水よ浮ぶがこ。山水の奇絶くふ於
くむあく口を閉づ。

○この頃の松を北より南ふまを枝凡三十間をうり。東より西ふ
りたり廿間餘。ときい三かくふあやり。木の丈け高くらむ。まん
丸も茂生を。是亦天下の名木。實よ一奇觀といふべし。

傳ふ云くこの頃の松をまをりて。唯智光秀松をうり。時、この外ふまを
うんをん一ツまあろし。てかけあやのうり風、その後これ松をうり。うんをん
まをんをうり。こまを又くまを、今この松、大坂加番の徳侯さま氏うつらき。ああり
とのふねのゆりの四層石垣をしていとお殿をあり。を平松松志のあ無殿を

を以て石燈をうつまふまふとありといふは、是れもかゝる俗に用ひて修治
一のふねのそとを不幸時神の社あり、小社なり。
或人の云ふ所の説く、非なり、いつの時の考をこふ四百年おむつ、その
一と敷山の泥濘まありといふ、いまは木をちのさま、百年木のりのわい、わら、
修治なり、
考ふべし。

坂本山王に詣り小便りよけまど。秋暑甚しく歩行ふたぐさ。か
ら崎より遥か山王の宮居を拜し。舟のりく三井寺へある。これ
より石山へ二リ半あり。終りゆきて京にかりぬ。

(八十) かゝ家の札

京ふくかゝ家の札。必き子供ふかせく。札を横ふ戸へまりのつけ
ど。かゝそればその家まやふまか。こりぬ。何ゆゑあることを志
らむ。一箱うゝのい。

(八十一) 京市中の喪 附名古屋 伏見

京まゝ忌中より。店上ふ黒き暖簾をうける。江戸ふく簾をう

ける類あがり。黒を喪服の色なまは、簾あがりま。

忌中の札は、
無地の暖簾

とくま、いんま、いん表あり。名古屋あゝ市中の葬礼ふ棺擲と禁む。
駕小白布をもちまかり。伏見あゝい棺甚立泓あり。棺を擔ぶ者
小至るまで。悉く社^{カシモ}衾を着る。四方小紙の天盖幡等をとて。上
下を着たるもれまを捧ぐ持あたり。鉦太鼓を鳴らし。法師兩
三人棺の先ふまを導く。身分よりまきまのあむ。
ともかゝのい。是土地の風俗あり。

○伏見の桃山あゝ。名のあむねまのこをかり山路の形

(八十二) 女兒の立小便

京の家々厠の前ふ小便擔桶あり。女もまゝ小便をま。故
に。富家の女房も小便を悉く立居てまを。但良賤とも
紙を用む。妓女まのりやまをのり便所はゆる。

月々六高やぐぐの小便桶をらふふあり。或は供二三人つきたる女。道々この小便たぐへ立あがり尻の方をむけて小便をするふ耻るのらあ笑ふ人あり。

(十三) 女子のぼう附伊勢尾張

京大坂伊勢あゝ。女子他へ出るあひ。うさげ帽子をわく。尤帽子うさげ少一つうさげあり。圓い糸京大坂の綿帽子を結むを。そのさまらうげの化物のど。名古屋を綿をうさげ腮の所小て結ぶ。ゆめえぶ。京あゝ三十以上の女を浅黄帽子四十以上を藤色の帽子。老女を紫或は黒。是京の風俗あり。凡女子の帽子をつらうさげといゆ人の迷風あり。えぶとてうさげも。江戸の女子の素面より他行よりあたまをまきわたり。

(十四) 粟田の陶器

京都の陶器。粟田口より。清水をわく。白川橋お松風亭とりの店あり。大坂兼葭堂このえれらんろきうを等を製す。又一軒旭峯との店あり。宇治の通圓が店あゝひさく茶碗を製す。こは二軒器物をうさげもの多し。

(十五) 京師の人物

京あゝ今の人物を皆川文藏と上田餘齋の。餘齋ハ浪花の人。京小張居す。あうまども文藏を徳行あらさうより。あゆ。秋成を世をいふ人ともうさげ。蘆庵を古人とわたりぬ。画を月溪と雅樂分の。蘆庵應舉むをせむ。

凡京師の文人。見識甚ご高上。情才小過さう。文學の事京師の外。か村學と称す。あうまども是と説話をうさ。ニツのうちニツを甘心あうさげに多し。夫都會の人氣おのづからうさげか。

きくふ。疵つゝもの僅ふ三人ありと。是實説ありとのふ。人おりの
 らく七十人をあやうふ多し。この話のそ文次其實を得たりと。
 明日高槻より人来る。則喧嘩のそとさきくふ。疵つゝものどつふ
 七十人。衆絶倒也。

文次嘗て友人を訪ふ云。時初春ゆて世上詩歌管絃の會初
 あり。僕も又啜のつき初をよぶ。来る十一日午時より。おの
 ちつまゝ。拙家へ來臨志のふべし。とかく約してかたりぬ。友人
 おりつら。文次虚談の會初を何をもつやらん。さびんばわら
 しと。本日各打つまゝその家よつまゝ。案内をこの小妻に
 出さ云。文次今朝より他行と。衆絶倒也。西村定雅話、文次
 今猶高倉あり

(八十七) 應舉る卧猪 此條兩談ふ出なきは省く

(全) 京の浮世繪 附澤庵画賛

祇園小セイビとの画工あり。おやま藝子の似くやを画くまを
 をうま。妓及戯子の似くやを綿繪ふ。そ多くまをり出さ。と近
 年の新製をり。あまも江戸のあ。た名小及也。

○予が旅宿せし泉屋変雨が妻。歌妓の圖を画く賛と乞ひけ
 せむ

つらむ春のねむるふらむのたあうか。と花もねむるふ
自注まつく、花といあけ代あり、四寸をとりはせん。二本たて、花一ツとを、昼
 夜まつ花三十、朝六つより暮六つまで花十二あり、夜も又わをり。

○京をたちける時
 のんどのふかもの川へふ流る。柳のそかり。すまふ。おま
 解

○京をくると澤庵和尚遊女の賛
 佛を法をり。祖師を佛をり。末世の僧を祖師をり。汝を

五尺の身を賣く。一切衆生煩惱を去る。色界是空。空界是色。柳をとり。花をらむあり。

水の向ふよあり。くうふりきりあつてもあまを新も流しき

是をよく人のあるあまを。あまをくくくあまを。かきぬ

同 淀の洪水 撞木町の噂

七月廿四日京を發し。午時伏見より船を乗りて大阪へ下る。泉屋変雨同行。今夜五時半頃大阪へ着岸。この間河々洪水の跡をるく駭然たり。淀八幡辺河々の堤崩れを。今専ら板をふり土を運びて普請を。淀の城の塀を屋根際ふまで水つれたりとるぬ。淀をく柱二本あがりて橋桁二所まを落るとぬ。水車を流してその跡僅か残る。高槻の城又かくれごとくとりぬ。枚方より二里をりあると點野仁知の間堤大か切を

水突流し。南。平野村ふりて東。駒ヶ嶺の麓ふ及び。西城際ふつり。北。澱河ふ連り。一面湖とありぬ。點野の既ふ河内ふ屬を。くは辺川高く陸車一故ふ水勢退くあとなり。今ふありく濁水大餘。その水至る時。樓屋梁を没し。樹木梢を洗ふ。村民丘陵ふ登り。或は隄防ふ集る。四方悉く怒波。兒女啼哭の聲天ふ遍し。民屋水面ふ泛し。その中尚燈火熒々たるもあり。亦老幼五六人大木を攀りて根枝を流る者有り。亦その子を畚の中ふおき。樹の上ふおけらるもあり。幸ふ逸きを一命を全ふも有り。然し一二のこ。あふ於て官命あり。舟人をてあまを極む。あまのきども水勢暴漲。舟至りて死考あり。官京橋の側ふ數十間の仮屋を作り。又道頓堀の雜劇（五ヶ所あり）當時その破損を修理あり。中ふ流氓（ヤクザ）を入らる。氓集るもの四千。則倉を發し

くくもふ資給しゆ。浪華の富商も又貯財を出しそくもふ施
 行も。大小一あつて。大阪八軒家辺水床ふ及び。天満天神橋そ
 余の小橋損とるりお三ツあり。二十日むつりふく水ややく
 減ぞ。岷故地ふかへる。まきもども決口より水入て田地濁水中ふ
 あり。或ち砂礫畹とべあらん。點野より西數十町堤お竹を柱
 とし藁を屋根とし。僅ふ雨露とせせぐもの數百人。伏見大阪
 の客船往來するものあまひ。十三四歳の童。小舟お掉さし來
 り。桶をおねお中へ投入し錢を乞ふ。旅客法然とて袖を濕
 し。則錢を乞ふ桶おのりもあまを流さ。乞者の舟下流おりり
 とあまを流さ。かくお下りおりの一夕數十艘あり
 ○凡伏見より淀まで。河水決口お入ると以て流まげ。或ち砂礫
 一所おあつて洲とある。くを以て舟自由をくげ。淀より枚

方の間。木津の水おあわく急流日頃お倍せり。點野より八
 軒家およりく。水又浅く流まげ。故お舟人河中お入る舟と押
 ち旅人もちかちあつものい。共お河中お入るもなまき。
 ○枚方の河中お酒食をうる船も。餅くらん酒くらん
 んくものい。あつてもども今を大に罵らむ。この辺まぐく言語尤も
 野鄙あり。

○伏見撞木町の妓樓。今を大おわらう。郭をむあし菜園
 とあまう。吾妻屋とらうのる妓樓只一軒のらまう。是さへいし
 へのさやあつ。いしぎめれど。僅おと遺跡をみるの。撞木町の
 赤穂義士のあつを墨本おて出さう。あつあつ人あつあつ今おあつ
 伏見おあつ。撞木町おあつ。あつあつ。あつあつ。あつあつ。あつあつ。
 伏見おあつ。撞木町おあつ。あつあつ。あつあつ。あつあつ。あつあつ。
 伏見おあつ。撞木町おあつ。あつあつ。あつあつ。あつあつ。あつあつ。

(十八) 八文字屋自笑う噂 附其碩 此もあつ大阪の活を

八文字屋自笑を。不文の俗人あり。其のころ京都南
 嶺といふ人あり。其の戯作を何れ。自笑作として出板
 あり。自笑といふ名も。これ南嶺がつけてあり。外は
 一人作者あり。その名をいふ。其のころ自笑作
 とあり。其のころ出せり。故に自笑作といふ。實は自笑が作を何
 らぞ。自笑を戯作と出来る人あり。其のころ八文字屋
 繁昌して業用むせり。只射利の俗人あり。其のころ
 俳優の評判記等。今も猶自笑作とあり。其のころ俗人あり。高
 名とあり。此人の幸あり。格中野亮のころ
 大阪の盧橘も元京の人なり。其のころ話あり。其のころ京都
 大佛のち元祖あり。この餅世に賞翫せらる。家富あり。其
 碩才學あり。よく戯作を何れ。これを自笑といふ。自笑作

とて出板しけり。其の本大に世に行われ。自笑利を射るよ
 とあり。其のころ其碩も密に後悔し。且名利をいふ。其のころや
 ありけり。のちあり。自笑其碩兩作のおり。其のころ出板しけり
 だ。その後故あり。自笑其碩雀執ふ及びぬ。よつて其碩その
 子小江嶋屋市郎右衛門其碩実名の名をゆけり。其のころ書林をさ
 せり。其碩が自作の草紙を多くあり。其のころ甚不幸の人あり。其
 碩一作として出せり。本を更ふ。其のころ大に損をしけり。其の
 め自笑が代作も。其のころ其碩があり。其のころ相違あり。又南嶺
 とのころ人も。國學ふらり。其のころ其碩あが及ぶ。其のころ
 あり。其のころ南嶺も老後戯作をし。自笑が作として出せり。其
 是をいふ。其のころ又自笑も少くあり。戯作のふきぬと
 あり。其のころ其碩と絶交して後を。自笑がふらり書

再按さう小南嶺は多田兵部後小柱秋齋と改名せしむる世國学者のゆゑ多し

も何れもど大りたの諸方の合力あり高名あり一人あり。此
かすしうろいあるもも能ハテ能あるが及ぶとくろふありとてのい説をう
げがごい今も能作とせよせしる能たさうろふありとてのい説をう
あまのうろいのみありとてのい説のうろいありとてのい説をう
うは年等ある人なり。京の古傳解の迹といへどもこも今を梅を他へあり
しや、あまのうろいありとてのい説をう
ちかすしうろいありとてのい説をう

八文字屋自笑を藤原姓あり安藤氏なり。自笑は京二條寺町
本覺寺に葬あり。今の八左エ門小至り四代なり。自笑は延享二年
丑十月十日没

年八先年京都あり類焼し後今の八左エ門の大坂心齋橋筋
安堂寺町小住あり。予うは家小たぐの行

く。自笑が傳記等をたぐぬる。別よのい傳たることもなりと

り。當時の役者評判記より八左エ門自作あり。江戸の巻を本町

の大橋氏えらあり。元祖自笑が説近ごろ江戸の蕪のから丸が

高名よなり趣とよく似たり。元祖自笑の子瑞笑、是よりまご自笑
と稱するのあり、他文あり今の八左の

い年あるかあるかあるかあるか又戯作をいふ人物ありとてのい説をう
評判は自伝すすといふ宮ありとてのい説をう
かめあり元祖自笑が
伝より符合せり、

(八十九) 奴の小万が傳

奴の小万の、本名をわねといつり三好氏。今尼とありく正慶と

號し難波村に隱居す。大坂長堀木津屋とのい豪家のむきめ

なり。今長堀銅吹處りぐとやの隣に大なる明屋敷あり。此所正

慶いが家なり。難波人の話あり十七八歳の時よ

り。さづのうら誓あり嫁せむ。夫をむつむ。そのころの世話あり

中しと小男をきりありあり。是をなありてかのまがわとふ

男ふそそむぬあり。男きりありあり。あきと俠氣あり

く。又書をよみ手迹をよみ。つらう大坂中を往来さう顔小墨を

ぬりそのうつ小白粉を施し。異形のうねありい扮ありありとて

連歌の發句とを書り手迹甚々美事あり。

金城春色映丹霞 活氣和風到萬家

潰笑冥然樓上興 捲簾先見園中花

早春 三好氏婆 正慶草

又

月と夜と松のせきをきゆとて

丁女丁

一山慶

詩も正慶草と云ふべ自作と云ふ。言語あつらひり俠氣ありと云つゝの老婆が忌きりふとの酒客と猫ありと。好事のものをあつらひて愛と。前年兼葭堂とつらひの用墨のうらふこの正慶小畫しめ。兼葭堂とつらひる小題書と。兼葭堂形の墨とつらひる大坂あり正慶を画とてまゝなり。このまゝとて画とつらひる人のりとの小應せと。大坂の人もその名をよむべ只奴の小まんとのと云ふ。按て小奴の小まんとの女使元祿のひありと

(九十) 近松門左衛門が傳 附墨跡

近松門左衛門も。越前の産とも又三洲の産ともいひ。今の並木正三が戲材録に云。肥前近松寺の僧の話云。近松門左衛門の。元肥前唐津近松禪寺の小僧あり。古澗と号す。積學よ依り住僧とあり。義門と改む。徒弟ありと云ふ。所詮一寺の主とありて。衆生化度の利益と云ふと大悟し。遂小行脚小出ぬ。そのとら肉縁の舎弟。岡本一抱子といふ儒医。京よりけりて。これ小寄宿し。還俗し。堂上家と奉ふ。有職の事も大に記臆せり。後浪人し。京都浄瑠璃芝居宇治加賀掾井上播磨掾岡本久称角太夫杯の浄瑠璃狂言を著述せしが。そのうち竹本義太夫小たのゆれ。出世景清といふ新戲文を書り。是近松が義太夫本戲作のまゝあり。是よりして數十部の作あり。まづ

近松が作を。勸善懲惡をむひと。衆生化度の方便を戲文中
 ふこめたり。是近松還俗の日發願のありむ記よりかといつり。義
 太夫が作者となり。近松氏を名乗ること。近松寺よりいふを
 ことばにせむる微意や。文中採要 愚云。これ説小ねが。此三井寺
 門前近松寺破戒の僧のうちありといふ説をたぐへるや。二代め
 義太夫が墓を千日寺より。則國字を以て略傳を志せり。文中
 元祖義太夫が傳も少のせたり。出ま元祖義太夫が墓を志る
 人なり。予正三を訪ふ。近松が墓所を問ふ。正三も志る。久々
 智の廣濟寺の過去帳に戒名あり。をうらり。よく正三が
 耳底簿をかり。久々智を神崎の隣村あり。

久々智廣濟寺過去帳

阿耨院穆矣日一具足居士

俗名近松門左工門

享保九年甲辰十一月廿二日

阿耨院の法跡を近松とらつつけお記し。之を辭世の詠草中ふ
 えり

○大坂金屋ぐり銅吹野熊野屋彦九郎所藏近松門左衛門辭
 世の詠草 紙中堅二五許、括二五許、を述り、ひか、後、の

甲男の家ふ生ま。武林はたれま。槐九郷は。昭天
 ぼく。ゆるく。寸。爵。あ。市。中。よ。さ。満。よ。ひ。て。高。貴。ま。は。り。は。は。り。
 似。く。は。よ。あ。は。れ。を。思。ふ。似。て。思。ふ。あ。ま。せ。の。海。は。ひ。り。の
 神。釋。信。道。和。歌。方。織。ろ。馬。野。曲。方。舞。滑。稽。ま。ま。る。
 事。あ。ら。う。む。よ。一。生。我。ひ。ち。ち。今。の。海。の。つ。り。め。き。
 志。の。一。大。事。中。ま。な。れ。信。感。至。思。の。甚。ま。ん。ふ。心。の
 秘。あり。ん。ま。あ。は。れ。記。我。世。經。よ。ま。ら。い。

やうに辞世ささるゝもそのち敷るゝ
跡を極のまれしあはれ

近松門左衛門松森姓信盛

号平安堂葉林子

阿耨院穆矣日一具足居士

又同人所藏美人の賛

紙中堅三尺余横一尺許
画ハ土佐畫のいふと云

樂天々意中乃美人を愛の母の
傍正遍照を詠中の意と終よるを
とるゝあまのこはれあはれ

化唐公

おのゝはらけをむね代よらんぬれを

衣表をあらうゝとののみむね

平安堂近松七十一歳 ね纏馬

これも文字を肉筆のこゝ 近松が肉筆ハ大阪中よ只この二幅
のこゝをうゝとらう

(九十一) 西鶴が墓誌

西鶴が墓を大坂八町目寺町誓願寺本堂西のうり手南向よ
り。三側目 七月晦日盧橘と同道ふく古墓をたけぬ。まうら
に西鶴が墓よ謁を寺僧もこれをあらざりし様子あり。花筒
み花あり。寺の男よ何りのが手向たてと問ふ。無縁の墓へを
寺より折く花をたつと云ふ。

棹石高廿二尺余
ヨコ一尺臺石
高七八寸
大字
總高廿二尺八九寸

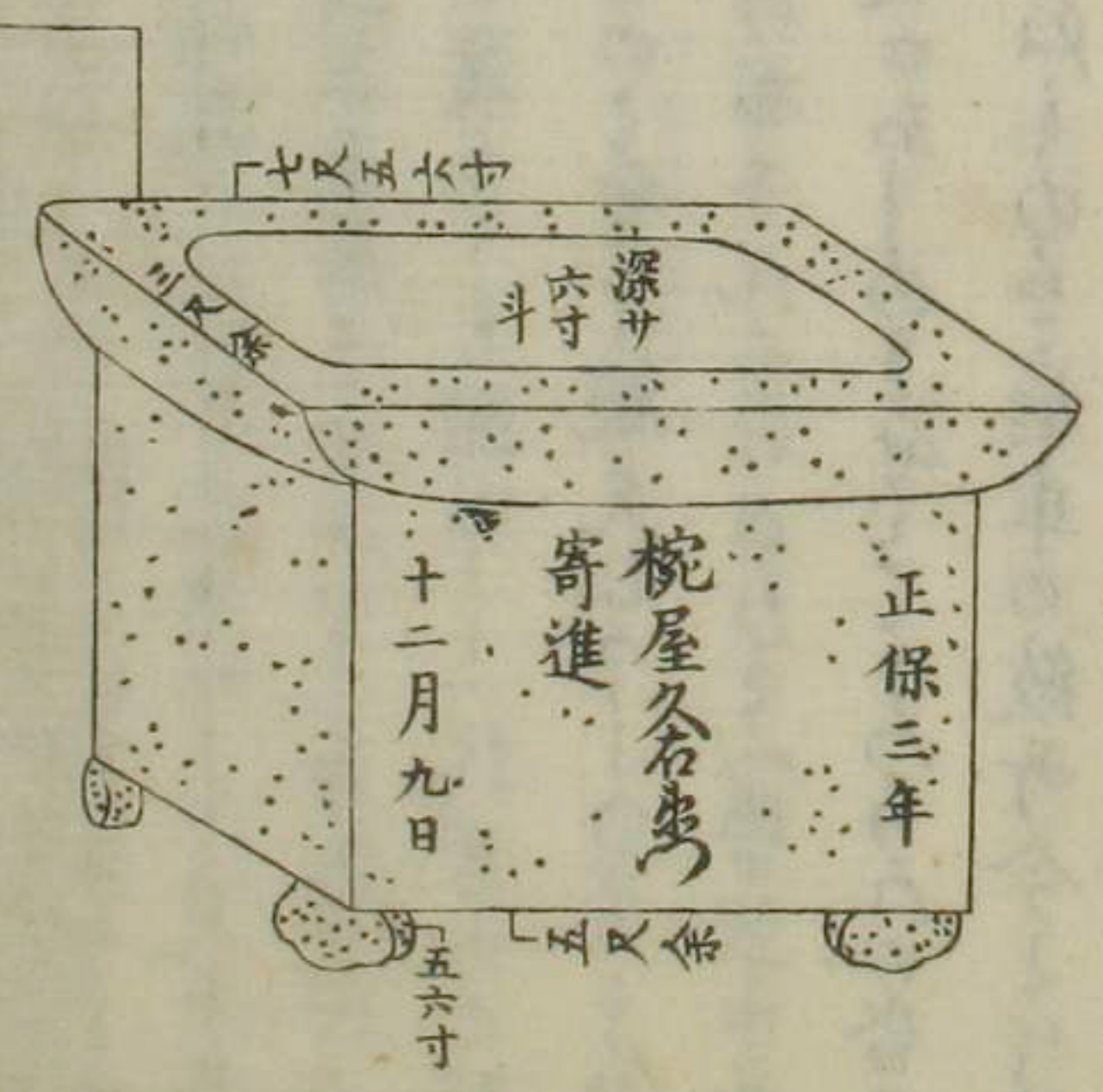


團水を西鶴が信友あり。西鶴没し後。團水京より來り。七年
そは舊廬を守り。そのと西鶴名残の友といふ草紙の序ふ
るへり

追考 難波雀よ云。西鶴の井原氏庵を鑓屋町よわり。
〔九十二〕 椀久奉納の手水鉢

椀久が奉納の手水鉢。大坂東門跡のけあよ書院の庭より。
所縁何らざるものれをいふ。

大坂の人にもあつたものれ多う
し去年杏花翁より見て見
出さる。あまうりて人これを
ありぬ。今書院普請最中あり。
庭あまう手水鉢最の中にあ
り。則ちあまを摺るふ石面
らのしあまをいふつらむ。りんと
あまうけをり。りんともろら
む。



か石ハ石づらみかき上の手水鉢と
タイハよりあふあふあふ下足ハ
常の石をさるるをいふ。

椀久が家を。京橋筋一説よあつりといふ。今その迹不詳。泉屋雨
壬 寄依曼録 卷之四 四十三 長三堂辛

柳の詰ふ。椀久が墓を大坂八丁目寺町實相寺本堂東南の方ふ
 有り。墓誌宗達之墓の延寶年中ふ没しぬ。墓の傍ふ松ありと
 のみ。予ら此を大坂出立の朝きぬ。ゆゑふ實相寺ふたぐの
 中へくるつゝ來るを得ど。尤うらむ。椀久ハ伊勢の人あり
 彼地も椀久が墓ありと云
 追考曲三味線ふ云。卷之三
 六張目墨羽織の兩股ふ翼のりて足を馬
 のしつゝ人々駕より出く一列ふ並居一中ふ少一勿休めは
 る人ハ天和年中ふ女護の嶋の渡り一と聞へ一一代男世之助
 とるく右と此津ふ名をのせ椀久むの姿を
 まむゆるや天窓よ立嶋の布子丸けのひと帯革巾着
 の何れくら懐ふ伊勢天目吸口あひのさせるとらん人の沓足
 袋細緒の奈良ざらふかぬもの扇車の紋所今とて
 智恵のふささめ顔して坐せり下略これれ椀久が紋所なれ

たり○元日コナトシ金歳越しコナトシの義太夫本ふ。椀久とひやうたんじ
 とと玉屋庄七が事を混合して作り。又小歌ふはくろ椀
 久物狂ひをひやうたんじコナトシの事なり。

九十三 美濃屋三勝が墓

此條并ふ夕霧が墓の事兩談ふこと
 けしむ省さぬ

九十四 遊女夕霧が墓

九十五 紙屋治兵衛が噂

紙屋治兵衛が墓を。大坂網嶋大長寺ふあり。近日の大水。こ
 の大長寺決口ふあり。墓所混亂して。或るお流し或ハ崩た
 る。故ふ治兵衛が墓をふゆりぞくやぬ。治兵衛が家の今
 猶連続して大坂ふありといふ。大坂今橋今猶紙屋治兵衛といふ紙問
 屋あり豪家なり世今橋のわぢぢぢ
 やいふ

九十六 淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂

淀屋辰五郎が奉納の手水鉢。天満天神の華表の傍より、
 雨柳の話なり。予天満へ参り一日をこの寺をありて。大坂出立
 の日よ聞ぬ。故よ終ふるの来らざる。椀久が墓と辰五郎が奉納
 の手水鉢をるぎもふと。旅中の遺恨あり。この手水鉢の工とこの
 後大坂木津屋政五郎の消息も穿鑿せし。絶くありとて
 り。木津屋を天満の人あり。神人とあてて交まらば聞ゆらせ
 めをあらはせり。

〔九七〕 乞丐女六が墓 附評

千日寺の前往來のうたをりあり。種々の墓あり。河豚をくらひ
 死したる四人のもの墓あり。下は石より大なる河豚のかちや彫
 刻し。それ上は棹石を建てる。四人の戒名をあるたり。あまらひ一
 時の戯ふ似たとて。後人口腹を貪るはいふ。めあもあらはし。或ハ

博徒の墓あり。獅子を刺し。上は棹石を建てる。大造ある墓あり。
 り。それ外異形の墓あり。江戸の回向院の如し。大坂ハ一体石
 小富たる所あり。ゆ名。石碑のつぎも立派あり。

○同所ハ乞食女六のもの墓あり。寶曆年中のことあり。此
 六もの乞食を。頗る見識あるものあり。奇人あり。死後大
 坂の使者あまらして墓を建てる。ゆり。その墓敷石二壇あり。中
 壇ハ戒名あり。上は石より六がからちを刺し。めんつうをもち酒
 樽のうへに立り。胸より上を欠くるほど。この六臨終ハ偈を残した
 るなり。一体心願あり。風狂人ともあり。甚だ奇人あり。けり。大
 坂の人々をり。安達が原の浄瑠璃本ハ六もの乞食女酒をの
 むとあり。この六が事を書し。ものあり。六生涯さげをこの
 めり。

六が石像面ありけり... 俗客付... 俗六名



二代目義太夫が墓 附元祖義太夫畧傳

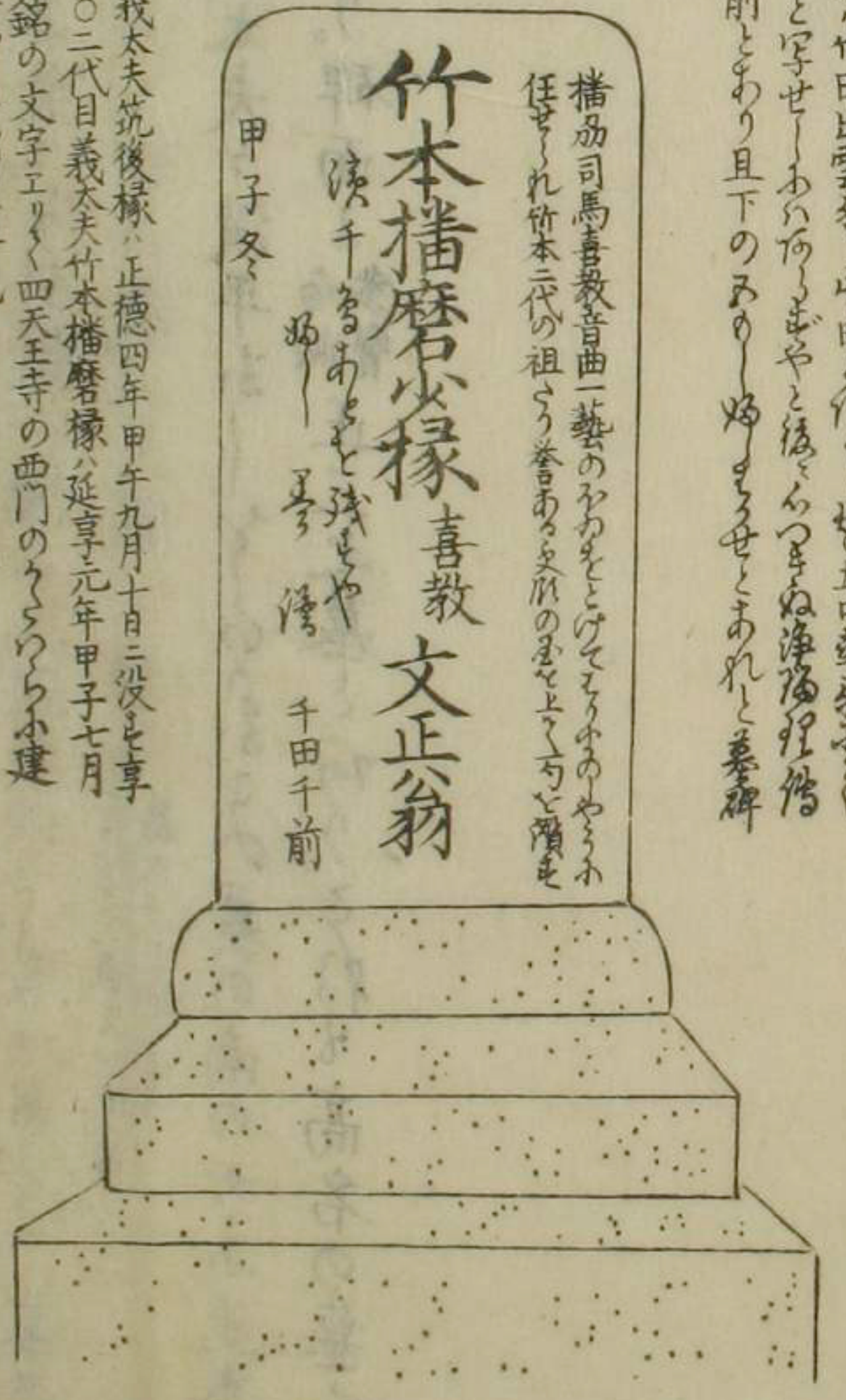
同所法善寺小竹本義太夫が墓あり... 二代目義太夫が墓をその所を失せ二代目義

再考 二代目義太夫ハ延享元年七月廿五日没也甲子ハ則延享元年あり

又按小義太夫傳記... 二代目義太夫が亡骸ハ當時天王寺の西門...

太夫を寛延三年庚午九月没スこの墓三回忌小建る所あり。

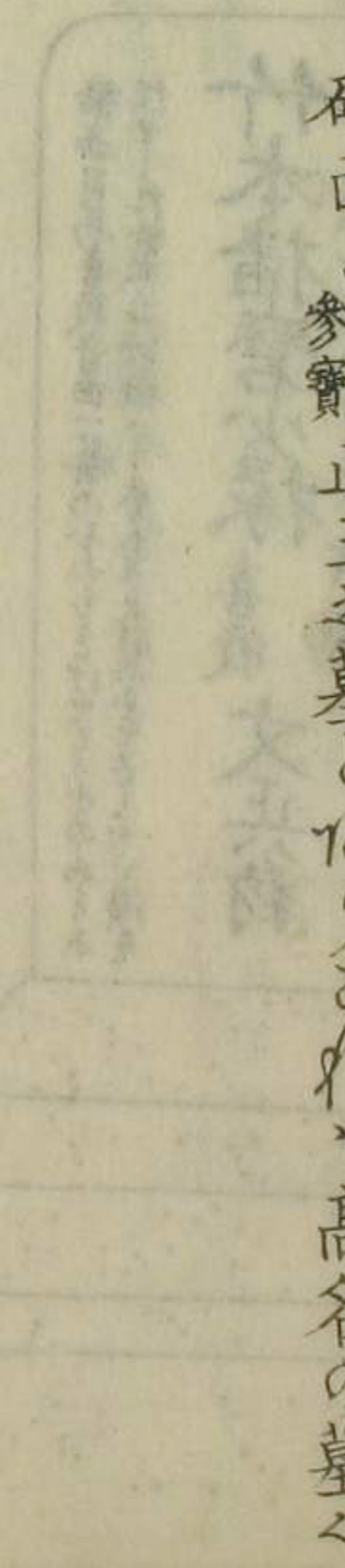
追考千田千前ハ竹田出雲あり... 追考元祖竹本義太夫筑後...



追考元祖竹本義太夫筑後... 追考元祖竹本義太夫筑後... 追考元祖竹本義太夫筑後...

元祖竹本義太夫ハ天王寺傍村ノ人。名ハ博教。字ハ五郎兵衛。号ハ道喜。浄瑠璃ノ音曲ヲ井上播磨椽。清水ノ徳屋利兵衛。京ノ宇治加賀小受ケ。その後一個ノ工夫を以テ。オトドめク一家ノ音曲をひらく。世ハ義太夫節ト号ス。これよりホニ代目義太夫ヲ傳ヤリ

○元祖竹本義太夫ハ天王寺傍村ノ人。名ハ博教。字ハ五郎兵衛。号ハ道喜。浄瑠璃ノ音曲ヲ井上播磨椽。清水ノ徳屋利兵衛。京ノ宇治加賀小受ケ。その後一個ノ工夫を以テ。オトドめク一家ノ音曲をひらく。世ハ義太夫節ト号ス。これよりホニ代目義太夫ヲ傳ヤリ



文中元祖義太夫ガ没年あり。どいつか。この墓ノ南ノ方ハ並木正三ガ墓あり。碑面南無正三之墓トあり。これも高名ノ墓ノ

羈旅漫録卷の中終

平山
日武
平山
夫ハ
二六
日武

